

シマ・ナガサキ原爆展」を開催するので、広島からも秋葉市長をはじめ1人でも多くの市民が参加してほしいと述べ、秋葉市長への伝言を託した。

寺田団長らは、伝言を必ず秋葉市長に伝えるとともに当協会から訪問団を派遣します、と約束し、カザンラック市での原爆展開催の「道」を創ったのである。



ダミャノフ市長と8月の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」開催について意見交換する寺田団長ら第1次・訪問団員



2005年7月に産声を挙げたばかりの「ひろしま・ブルガリア協会」から、東欧の国・ブルガリアへ派遣された「第1次・ブルガリア訪問団」(寺田団長、10人)のメンバーとダミャノフ市長(前列、中央)、福井特命全権大使(前列、中央左)、香川JICAブルガリア事務所長(3列目左)ら=カザンラック市役所で

8. 平和の祭典・ばら祭りを通して自由民主主義を謳歌している姿を見る

6月4日(日)は、カザンラック市で毎年開かれる平和の祭典・「ばら祭り」を見学した。広島のフラワーフェスティバルを少し小さくしたような市中パレードだった。メイン通りでは、まず主催者・カザンラック市のダミャノフ市長とゲオルギ・パルヴァノフ大統領が、1989年に旧ソ連社会主義から自由主義に移行して以来、新たな国づくり、街づくりをめざし発展しつつあるブルガリアとカザンラック市の状況と平和の重要などを踏まえて、楽しい1日をとあいさつし、ばら祭りの開催を宣言した。

これに続いて、各地からの民族衣装や騎馬隊、未来の女王、2006年度・ばらの女王などのパレードが繰り上げられた。

明るく笑顔でパレードする未来の女王やばらの妖精、ばらの女王などの姿を眺めながら、「平和と希望」の大切さを強く感じた。



挨拶するゲオルギ大統領とダミャノフ市長



可愛らしい未来のばらの女王



可憐なばらの妖精



2006年度から始まった「ばらの谷の女王」コンテストで選ばれた初代の女王

9. 大統領府で原爆展開催への支援を要請

6月6日(火)、首都・ソフィアに戻った訪問団一行は、大統領府にアルゲン・マーリン副大統領を表敬訪問した。この日は、残念ながら同副大統領が急きょ大統領の代わりとして海外出張となったということで、女性のスペトラ・トシコヴァ官房長が笑顔で出迎えてくれた。

同官房長には、藤田広島県知事や秋葉広島市長からの親書を手渡すとともに、原爆ドームのタペストリーや宮島彫りの飾り盆、県と市の観光パンフレット手づくりのお土産などを贈った。

中でも、カザンラック市で行う原爆展の内容紹介パンフレットを渡しながら、「今年8月に行われるカザンラック市での原爆展成功のためにご支援とご協力をお願い致しますと、副大統領にお伝えください」と要請した。



大統領府でトシコヴァ官房長官と記念の写真に

Ⅲ. 第1次・ブルガリア訪問団員からのコメント

1. 原爆ドームのタペストリーをダミャノフ市長に贈り訪問団の役割果たして安心



第1次・ブルガリア訪問団
副団長

福本 尚子 理事 カルチャーセンター主宰

日本や外国の文化交流と理解を広げるために数年前から、愛と奉仕の精神で自社ビルを交流の場として提供する「リリー・カルチャーサロン」を主催し、イタリア、中国などの語学から、長唄、詩吟、食育、雅楽教室などを開いています。



日本伝統文化の長唄を披露し歓迎した「ダミャノフ市長を囲む夕べ」(2005年8月5日)

この中で、ひろしま・ブルガリア協会の創設時に誘いを受け、参画しました。カザンラック市との縁は、2005年8月5日の「ダミャノフ市長を囲む夕べ」で長唄名取の杵屋六東茂・師匠とともに日本伝統文化を披露したことから始まりました。加えて、2006年の第1次・ブルガリア訪問の直前の5月1日から、同市のバラの女王を迎えて県内各地で交流した中で、同11日にリリー・カルチャーサロンで日本伝統の長唄、詩吟、雅楽などの演奏を通して「チャリティー交流会」を開き、楽しい一時を過ごすことができました。

そして、第1次・ブルガリア訪問団の副団長として2006年6月3日に、カザンラック市を初訪問。再会したダミャノフ市長には、広島市長からの原爆ドームのタペストリーなどを贈り、同市長から8月の原爆展開催を確認しました。

第1次・訪問団の目的である 同市とヒロシマの「交流の道」を創ることができ、ホッとしたのが昨日のこのように懐かしく思い出されます。訪問団員のご協力と関係者のご支援を受け、訪問団の役割を果たすことができました。

ヴァリコ・タルノヴォ市では、大学の日本語コースの学生・マリエッタさん宅にホームステイして楽しい一時を過ごすことができ、良き思い出をつくることができました。皆さま本当にありがとうございました。



リリー・カルチャーサロンでチャリティー交流会
(2006年5月11日)



カザンラック市のダミャノフ市長と原爆展について意見交換



ホームステイ先のマリエッタさんと夕食懇談

2. 2005年8月5日のダミャノフ市長との交流がカザンラック市との出会いに

第1次・ブルガリア訪問団

事務長



本多みどり 理事 主婦

2005年8月5日に「ダミャノフ市長を囲む夕べ」と歓迎パーティで、同市長と会い親しく歓談したのが、カザンラック市との出会いでした。

翌2006年5月には、同市のバラの女王・イヴァノヴァさんと日本語弁論大会優勝者・エミリアさんを当協会で開催し、ひろしまFFの前夜祭からオープニング、パレードなどのエスコート役を引き受けました。

さらに、我が家でホームパーティとホームステイ、翌日には、私の生まれ故郷・熊野町の筆の里にご案内するなどをして、一段とブルガリアとカザンラック市が身近に感じられました。

そして、第1次・訪問団では事務長の役で参加し、カザンラック市役所でダミャノフ市長と1年振りに再会し、広島にある世界遺産の一つ、厳島の「宮島彫り」を手渡し感無量でした。その席上で、昨年の約束通りに8月に原爆展を開催する準備をしており、すでに原爆展に展示する被曝写真ポスターが届いている、と聞き、第1次・訪問団の大きな役割を果たすことが出来た、と嬉しくなりました。

この第1次・訪問団の任務を引き継いで、第2次・訪問団が多くの関係者と連携を取りながら原爆展を開催・成功に導いて下さったことを感謝しております。



本多邸でコーヒータイム



原爆資料館でプラメナさんが揮ごう



ひろしまFFでばらの女王と日本語弁論大会優勝者を案内



ダミャノフ市長に広島の世界遺産・宮島の宮島彫りを手渡す本多常任理事

3. カザンラックのバラの女王受け入れで友好と平和の絆が一段と強く

第1次・ブルガリア訪問団

団員

山尾ひとみ 理事 ヤマオコーポレーション代表取締役



山尾理事ご夫妻と

神様がくれた国といわれる東欧の国・ブルガリア。私にとっては、ブルガリア・ヨーグルトと、最近は琴欧州しか馴染みのない未知の国でした。

福本尚子さんの紹介で、ひろしま・ブルガリア協会に入り、これまで多くの素敵な出会いと素晴らしい経験をさせてもらいました。

中でも、2005年5月1日からひろしま・ブルガリア協会が招待したカザンラック市のバラの女王・プラメナさんと、ヴェイコ・タルノヴォ大学からの日本語弁論大会優勝者・エミリアさんを9日間に渡るホームステイを引き受けさせていただきました。

この間、私の家族とも交流を進め、世界遺産の原爆ドームと宮島の案内、家族との会食会など、楽しい思い出をたくさん創ることができた、ブルガリアとカザンラック市が身近に感じられるようになり、また平和の大切さを身にしみて感じたものでした。

そして、第1次・ブルガリア訪問団に参加し、ダミャノフ市長の表敬訪問の後、同市役所を出



原爆ドーム前で娘と(2006年5月)



世界遺産・宮島を案内(2006年5月4日)



山尾理事の家族と豆腐料理店で



プラメナさんとカザンラックで再会

たところで、プラメナさんが待っていたことに驚くとともに、なぜか涙が出てたまりませんでした。ヴェリコ・タルノヴォでは、エミリアさんとも会い、また、同大学の日本語コースの学生の家でホームステイさせていただくなど、ブルガリアに新しい子どもができたような思いがしています。

* ばらの女王らの招待をはじめ当協会活動に多大なご理解とご支援をして惜しまない有限会社・ヤマオコーポレーションには当協会から感謝状を贈りました。



日本語コースの学生と交流



ヴェリコ・タルノヴォ大学



ホームステイ先の学生と夕食懇談会
(ヴェリコ・タルノヴォ市内のレストランで)

4. カザンラック市の原爆展開催への「道」作りに参加して感激



第1次・ブルガリア訪問団

団員

木村 一江 理事 グループホーム施設長

ブルガリアとの縁は、親友の本多みどりさんから誘われて入会したのが始まりで、その後、カザンラック市からの、ばらの女王らの招待と原爆資料館の案内などを通して、同国・同市への関心が一層深まったのです。

そして、大変な意義のある第1次・訪問団に参加し、ブルガリアで会う人々の瞳が澄んでいて、心のきれいな人、素直な国民性を持っている国、との印象を強く受けました。また、団員が素晴らしい方ばかりで、本当に気持ちの良い旅でした。

午前中は、大統領府やカザンラック市などの表敬訪問に参加しましたが、全ての経験が新鮮・貴重で興味深く、観光だけではない意義のある訪問団であることを実感したものです。世界遺産・リラの僧院やトラキア人の墓、ボヤナ教会、ローズオイル精油所の視察なども素晴らしかったことは言うまでもありません。

中でも、カザンラック市を訪問しダミヤノフ市長と会い、意義のある8月の原爆展開催の確約を取ることができ、同展の「道」づくりに参画できたことを感激しました。

また、世界遺産のリラの僧院やボヤナ教会などを見学し、ブルガリアの長い歴史の一端を垣間見た思いがし、本当に素晴らしい訪問で、再訪したい国の一つになりました。楽しかった出会いと思い出をありがとうございます。



プラメナさんらを原爆資料館に案内



平和の願いを込めて揮ごう



ブルガリアン・ローズオイルの抽出方法の説明を受ける



大統領府の正面玄関



世界遺産・ボヤナ教会

5. ばらの女王らとブルガリア料理をつくり平和と国際理解の大切さを感じる



第1次・ブルガリア訪問団

団員

佐藤佳代子 幹事 主婦

ばらの女王・プラメナさんと日本語弁論大会優勝者・エミリアさんを広島に迎えた際に、協会のブルガリア料理教室と歓迎パーティで料理担当をしたことから一段と、カザンラック市への思いが深くなりました。

この料理教室では、エミリアさんとプラメナさんも急きよ参加し、母国から持参した香辛料などを使った本格的なブルガリア料理ができ、引き続き行われた歓迎パーティで参加者全員が美味しくいただきました。

これを受けて、第1次・訪問団に参加したが、ブルガリアの豊かな高原、あちこちに馬や牛、羊が放牧され



料理をする(左から)佐々木、佐藤、川口さん

た、のどかな風景に心が和んだ。首都・ソフィア市からバラとトラキア遺跡の街・カザンラック市まで、電車で4時間と聞いた時、観光バスで移動するのではなく電車でゆっくりと旅するのもいいな、と思った。

古い帝都といわれるヴェリコ・タルノヴォ市では、小高い山の上に築かれた城の跡に、未だに残っている城壁と山頂に建てられた教会があり、谷の反対側にヴェリコ・タルノヴォ大学があった。夜9時過ぎからは、城跡を舞台に繰り広げられたスケールの大きい光の芸術には圧倒された。

カザンラック市では、ダミヤノフ市長と再会して懐かしく思うとともに、原爆展の開催を快諾してくれたことに感謝した。花の女王・ばらの花摘み体験では平和なありがたさを実感し、翌日の「ばら祭りパレード」では、各集落から駆け付けた昔の騎士団姿や民族衣装を身に付けた人たちを見ながら、同地域の歴史や文化の一端を垣間見た思いがした。平和は持続しなければ、と実感した。



料理教室でプラメナさん(中)、エミリアさん



花の女王・ばら摘み体験で



ヤントラ川の崖上に建つ家並み



宮殿跡のウアレヴェツツエの丘の教会

6. カメラ係りとして写真記録を残す。戦争は絶対悪ということを再確認



第1次・ブルガリア訪問団
団員

坂井 紗織・幹事 広告デザイナー

「記念に残る貴重なカットの写真を撮ってくれて感謝している」といわれ、責任の一端を果たしたと思っている。

一番印象深かったのは、標高2,925mのリラ山の1,147メートルの麓に建設された世界遺産・リラの僧院だった。ブルガリア正教の総本山とあって美しい壁画や4、5階の回廊・僧侶宿舎に囲まれた荘厳なものだった。院内の歴史民族博物館では、104の聖書の場面を彫った十字架、石に刻まれたキリル文字、古書、イコンなどが展示され10世紀からなる同正教の歴史に感動した。

ソフィアでは、2005年8月に広島市内での、ささやかな歓迎夕食で歓談したソフィア大学医学部5年生のジェコ・ディミトロフ・ナイチョフさんと再会した。ナイチョフさんは、核兵器被害と医療の研究のために広島を訪問していたのだが、懐かしかった。ヴェリコ・タルノヴォ大学では、日本語学科の学生と交流しホームステイしたのも、楽しい思い出になった。

バスガイドからブルガリアの歴史を聞き、独立するまでに大きな戦争犠牲があったことを知った。500年間に渡るオスマントルコの侵略と圧政。ブルガリア人が何度も蜂起したが、その都度、大きな犠牲を出して鎮圧された。1878年にロシア軍がオスマントルコを破ってくれ、やっと独立国になった。そして、1989年にソ連から離れて自由主義の国になったという。

戦争は絶対悪ということを再確認した旅だった。



ソフィア大学医学部生のナイチョフさん(左)と(2005年8月、広島市で)



ヴェリコ・タルノヴォ大の学生と交流



リラの僧院で写真を撮影する坂井さん(左)



世界遺産・リラの僧院内部



平和の祭典・ばら祭りのパレード



世界遺産・リラの僧院の壁画前で



世界遺産・トラキア人の墓記念館

7. ばらの女王らを原爆ドーム周辺に案内したことが思い出

第1次・ブルガリア訪問団

団員

今村悦子 家族会員 会社員



2006年8月のある日、山尾ひとみさんからバトンタッチされ、ばらの女王・プラメナさんと日本語弁論大会優勝者・エミリアさんを広島平和記念公園に案内した。ゆっくりと散策しながら原爆ドームや折鶴の塔などを案内すると、各説明文を静かに読んで、いわれを理解しようとしていた二人の姿が強く印象に残った。また、ブルガリア料理などを通してブルガリアが身近に感じられるようになり、一度は訪問したいと、強く思うようになった。

ブルガリアは、緑の高原に馬や牛、羊が放牧され、街中でも馬車が行き交う牧歌的なところだった。ばらの町・カザンラック市では、民家に植えられた桜の木に直径1cmほどの赤や黄色のサクランボがたわわに実っていた。世界遺産・トラキア人の墓を訪れた際に、上り口などで透明の容器に入れて売っていたサクランボを買って食べてみた。自然栽培で実った果実とあって、とても甘く美味しかった。

世界遺産・リラの僧院に行く途中のコチュリノヴォ村では、あちこちの民家の暖炉の煙突の上に、直径1mほどのコウノトリの巣がつけられ、巣の中では小さな雛鳥が親鳥から餌をもらう姿が見られた。春にブルガリアに渡ってきて卵を生み、子育てをした後、冬になるとアフリカに飛んで行く渡り鳥。毎年、同じツガイが同じ煙突に巣をつくり子育てをする、という。町の人たちは、温かく見守っており心優しい人間と鳥と自然が共生していた。自然豊かな環境に心が和む思いがした。

平和そのものだった。しかし、この国でもオスマントルコからの500年に及ぶ圧政や民衆蜂起、ソ連共産主義圏の時代、そして民主主義の自由な現在になったという。歴史の重さと平和の素晴らしさを感じた旅だった。



折り鶴の塔の前で記念撮影



広島原爆の爆心地で



リラの僧院行く途中の町にコウノトリが



放牧された牛の群れと青い湖



ブルガリア料理教室で

8. 原爆展や日本文化などを紹介し、普通のツアーでは経験できない内容

第1次・ブルガリア訪問団

団員

水上由里 会員 ペンション経営



友人の福本尚子さんから誘われて、ひろしま・ブルガリア協会に入り、初めてのブルガリア訪問の旅に出かけた。

ブルガリアでは、大統領府やカザンラック市の表敬訪問をはじめ、第18総合高校やヴェリコ・タルノヴォ大学の訪問し、カザンラックでの原爆展や日本文化な



ソフィア第18総合学校で日本を紹介

どが紹介でき、普通のツアーでは経験できない意義のある内容の訪問団活動であった。

かつての帝都・ヴェリコ・タルノヴォ市では、昼間は大学訪問と同大学の日本語学科の学生との交流を行い、夜は城跡を舞台にした30分以上に渡る夜の光のショー「戦乱を乗り越えたヴェリコ・タルノヴォの歴史」を鑑賞し、そのスケールの大きさには感動した。

また、カザンラック市でダミヤノフ市長に初めて会い、同市長から8月の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の開催を確認できたことで、同展開催への「道」づくりに参画できたことが、広島市出身者の一人として忘れられない良い記念になった。



ヴェリコ・タルノヴォ大学の日本語学科

IV. 原爆展開催の「実施・完結」・・・第2次・ブルガリア訪問団がオープニングに参加

1. 開催期間、場所、主催者、来館者数など

開催期間 2006(平成18)年8月1日(火)～8月31日(木)＝休館日除き28日間

開催場所 ブルガリア共和国 カザンラック市 カザンラック・アートギャラリー1F

主 催 カザンラック市、ひろしま・ブルガリア協会

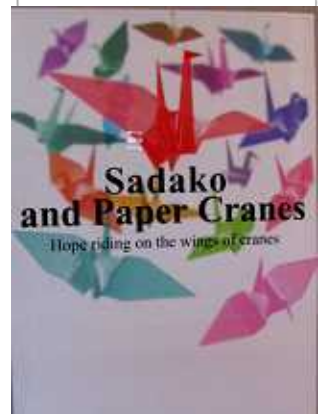
協 力 カザンラック・アートギャラリー、広島平和記念資料館

後 援 在ブルガリア日本国大使館

来 館 者 オープニング＝約60人

被爆者の証言＝20余人

延べ来館者数＝約800人(約30人/日平均)



広島平和記念資料館の原爆展案内ポスター

2. ひろしま・ブルガリア協会からの参加者

3人(広島市民2人、呉市民1人＝役職は当時)

- 1) 団 長 今村 功 常任理事・事務局長 協会専属
- 2) 団 員 海生 郁子 会長夫人 英語通訳
- 3) 団 員 佐々木 愛子 理 事 被爆者

3. 原爆展関係の訪問日程

7月31日(月)＝カザンラック市役所と会場で原爆写真展の打合せ。

8月 1日(火)＝カザンラック市の原爆写真展会場でオープニングに参加。

8月 2日(水)＝原爆写真展会場で被爆者の証言。

4. カザンラック市長を表敬訪問＝7月31日(月)



カザンラック市役所



カザンラック市のダミヤノフ市長と「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の最終打合せ



市中心部に掲示された原爆展案内ポスター



原爆展の案内チラシ

5. ヒロシマ・ナガサキ原爆展への提供資料の目録

カザンラック市長

ステファン・ダミヤノフ様

2006年8月、カザンラック・アートギャラリーで開催される原爆展(主催:カザンラック市、ひろしま・ブルガリア協会 後援:在ブルガリア日本大使館 協力:カザンラック・アートギャラリー、広島平和記念資料館)にあたり以下の資料を広島平和記念館よりブルガリア・カザンラック市に寄贈いたします。

「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター」1セット(ロシア語、30枚)

「サダコと折り鶴ポスター」1セット(英語、26枚)

DVD「ヒロシマ・母たちの祈り」(ロシア語、1枚)

DVD「ヒロシマの証言」(英語、1枚)

核兵器廃絶と恒久平和の実現に向け、原爆展を開催される貴市の取り組みに対し、深く御礼申し上げます。

2006年5月26日

広島平和記念資料館

館長 前田 耕一郎

原爆展の内容紹介パンフ

ダミヤノフ市長と記念撮影



訪問団一行は昨年8月5日、ダミヤノフ市長と会い懇談した時に2006年6月の第1次・訪問団を派遣すると約束、さらに同訪中団の寺田団長らが、「被爆写真展の時に訪問団を派遣する」と約束した。約束通りに、当協会が8月に第2次・訪問団を派遣したことをダミヤノフ市長は歓迎してくれた。

同市長からは、「秋葉広島市長にカザンラックへ早く来ていただきたい。今後、広島県・市民との交流を一層深めていきたい」との伝言を預かる。

原爆写真展については、会場のアートギャラリーで待っている担当者と具体的に相談してほしい、と語った。終始、和やかな雰囲気の中で会話した後、カザンラック市と広島の更なる交流の促進を期して記念撮影をした。



6. 原爆展会場で最終的な打合せ = 7月31日(月)

「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の会場は、カザンラック市の中心にある立派なカザンラック・アートギャラリーだった。

この建物は、1階に美術館、2階に博物館があるものだった。訪問団の一行は、会場のカザンラック・アートギャラリーに行き、フリスト・ゲネフ館長(写真下の中央)と展示方法について色々検討した。展示会場は、同館1階の左側にあり、L字型の展示場だった。

美術館とあって、「サダコと折り鶴」ポスター26枚と「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真」ポスター30枚が、パネルに張られきれいに並べられていた。

しかし、当協会が事前に連絡をしていなかったために、広島平和記念資料館の図録や広島を紹介する冊子、さらに海生会長夫人と被爆証言を語る佐々木理事が用意してきた千羽鶴などの置き場所が設けられていなかった。

このために、同館長に急きよ、資料や千羽鶴などを置く台(次ページ写真)を用意してもらった。



原爆写真展会場のカザンラック・アートギャラリー



入口横の窓には原爆展案内ポスターが貼られていた



この日の準備には、カザンラック市からスレブラ・カセヴァ専門家、スタニスラヴァ・バルカスカ・国際プログラム課専門家、ブルガリアと英語の通訳者(ともに女性)、ゲネフ館長と職員(男性4人)らが、遅くまで担当してくれ本当に助かった。

言葉が通じないところは、旅行社のアルバイトでヴェリコ・タルノヴォ大学3年生(当時)のシルビアさんに通訳してもらった。いずれにせよ今回は、現地旅行社のマルコフ社長や姪御のナディアさん(同大学1年、当時)らのスタッフに大変お世話に



資料や千羽鶴を置く台(上2枚)と婦人国際平和自由連盟広島地方支部らから寄せられた千羽鶴(右)



7. ヒロシマ・ナガサキ原爆展のオープニング＝8月1日(火)17時～

原爆写真ポスター



原爆写真展の意義を強調しながら開会あいさつするダミャノフ市長
オープニングセレモニーで挨拶する横山参事官と訪問団メンバー



横山佳孝参事官



今村 団 長



海生会長夫人



佐々木理事
(被爆者)

- 1、被爆死者
1945(昭和20)年12月
末までに広島で約14万
人、長崎で約7万4,000人
が亡くなったと(推定)。
- 2、原爆投下の目標
広島市の中心部を流れる
太田川に架かるT字型
の相生橋(あいおいばし)。

オープニングの当日はゲネフ館長の司会で進められ、マスコミ5社(テレビ3社、新聞2社)をはじめ、多くの市民ら約60人が集ってきた。参加者らは、ダミャノフ市長や在ブルガリア日本国大使館の横山参事官、訪問団員のあいさつに真剣に耳を傾けていた。

今村団長は、原爆写真展の開催に対する謝意を表するとともに、核兵器の廃絶を希求する「ヒロシマの心」を訴える秋葉忠利広島市長からの親書を紹介。海生会長夫人は世界平和と友好交流の推進を希望する直人会長のメッセージを代読、佐々木理事は被爆体験を紹介しながら核兵器のない平和な世界を、と訴えた。事前連絡では、アートギャラリーと当協会の主催と聞いていたが、現地では同市との共催になっていた。原爆写真展に対するダミャノフ市長の思い入れの深さを強く感じた。



- 3、爆心地
目標の相生橋より東に
300m離れた島病院の
上空約600mで、さく裂した。



秋葉市長の親書を渡す



少女からバラのプローチをもらう



乙女から絵皿など市からの贈り物



爆心地にある説明板

8. カザンラック・アートギャラリー 館長のあいさつ



61年前の原爆被害の展示で世界平和の貢献を

カザンラック・アートギャラリー

館長

フリスト・ゲネフ氏

今から61年前に広島と長崎に原子爆弾が投下されて大変な被害を及ぼしました。今日から始まるアートギャラリーでのヒロシマ・ナガサキ原爆写真展を通して、核兵器廃絶と世界平和に少しでも貢献できればと思っています。原爆展の開催中に一人でも多くの市民が来館され、原爆の脅威や惨状を見ていただき反核兵器と世界の恒久平和を希求する「ヒロシマ・ナガサキの心」を共有していただくことを願っています。

9. カザンラック市長のあいさつ (主催者挨拶3ページを参照)

10. 在ブルガリア日本国大使館 参事官のあいさつ



原爆展開催に尽力した関係者に心から感謝

在ブルガリア日本国大使館

参事官

横山 佳孝氏

本日、ここにカザンラック市ギャラリーにおいて、平和へのメッセージを込めた広島原爆展のオープニングを迎えることができ、大変嬉しく思います。

この原爆展開催にご尽力頂いたカザンラック市の皆様、ひろしま・ブルガリア協会の皆様、そして資料をご提供頂いた広島平和記念資料館に、心から感謝申し上げます。

昨年が丁度、第二次世界大戦後60周年に当たりましたが、今年で広島に原爆が投下されてから61年が経つこととなります。

戦後61年の間に、広島は国際平和文化都市として、大きな発展を遂げました。原爆の惨劇を味わったからこそ、一層強く世界平和を希求する広島の人々の願いは、歴史の証人として世界文化遺産に登録された原爆ドームの姿とともに、こうした世界各地での原爆展を通じて、世界中の人々の心に届いているものと確信しています。

そして、日本政府も、戦後、核兵器の無い安全な世界を目指し、国際社会において、平和国家としての地位を築くことを選択しました。核の惨禍を経験した唯一の国として、広島・長崎の悲劇が決して繰り返されてはならないとの決意の下、世界中に、核兵器の非人道的な脅威、その引き起こす惨劇の恐ろしさを伝え続けています。

本日、この広島原爆展にお集まり頂いた、日本と同じく平和を愛するブルガリア国民の皆様の前で、改めて、日本は今後も、平和憲法を遵守するとともに、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶に全力で取り組んで行くことをお約束すると共に、本日は皆様と共に、再度、原爆の脅威、そして平和の尊さについて、考えてみたいと思います。

最後となりましたが、日本と非常に友好的な関係を続けているカザンラック市の益々の繁栄と、ご来場の皆様のご健康とご多幸を祈念して、挨拶と代えさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。



原爆展のオープニングセレモニーには5社のテレビ、新聞社が取材して全国に報道した

原子爆弾



4. 原爆のエネルギー

原子爆弾は、従来の爆弾・兵器とは全く異なって、爆発の瞬間に

①超高温の「熱線」

②温度の急速上昇に伴う周囲の空気膨張による巨大な「爆風」

③「放射線」

の3大エネルギーを発生させた。

原爆エネルギーの内訳



この熱線、爆風、放射線が複雑に絡み合い、瞬間的、無差別に大量の破壊・殺りくが引き起こされた。

さらに、生き残った被爆者をケロイドや白血病、原爆白内障、ガン、体内被爆などの後障害(こうしょうがい)で長期に渡り苦しめている。

5. 原爆の威力と脅威

原爆の威力と脅威の中には、3大エネルギーの他に放射能を含んだ「黒い雨」による被爆もあった。

熱線



11. 広島市長のメッセージ

2020年までに世界から核兵器の廃絶を



広島市

市長

秋葉 忠利 氏

第1回「ヒロシマ・ナガサキ被爆写真展」が開催されるにあたり、メッセージをお送りいたします。

ヒロシマは、人類最初の被爆体験を原点に、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に訴え続けてきました。しかし、世界各地で憎しみと暴力、報復の連鎖が断ち切られないまま、今なお地球上には大量の核兵器が存在し、核兵器が使用される可能性さえ高まっています。

このため、広島市は、世界の約1,400の都市が加盟する平和市長会議とともに、2020年までの核兵器廃絶を実現すべく「核兵器廃絶のための緊急行動」に取り組んでいます。特に、「核兵器の使用・威嚇は、一般的に国際法に違反する」とした国際司法裁判所の勧告意見から10周年を迎える今年、勧告的意見の意義や重要性を改めて確認し、核軍縮に向けて「誠実な交渉義務」を推進するキャンペーンを世界的に展開し、その取り組みの一環として、核保有国に対し都市を核兵器の攻撃目標とはしないことを要請します。

人類の未来を決定するのは、この地球に生きる一人ひとりの市民です。こうした意味からカザンラック市において、「ヒロシマ・ナガサキ被爆写真展」が開催され、被爆の実相をカザンラック市民の皆様理解していただくことは誠に異議深く、ステファン・ダミヤノフ市長をはじめ関係者の皆様の御努力に深く敬意を表します。皆様が、今後とも、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現のため、私たちとともに力を尽くし、行動して下さることを心から御期待申し上げます。

終わりに、「ヒロシマ・ナガサキ被爆者写真展」御成功と御参加の皆様のご健康をお祈りいたします。

平成18年(2006年)8月1日

(代読:今村 功 団長)

毎年8月6日の「ヒロシマの日」に行われる広島平和記念式典(平和公園)



12. 協会・会長のメッセージ

両国で共有したい「ヒロシマの願い」



ひろしま・ブルガリア協会

会長(当時)

海生 直人 広島修道大学教授

この度、カザンラック市で被爆展が開催されるにあたり、ひろしま・ブルガリア協会から第2次・訪問団を派遣しました。大変申し分けないことに、また残念ながら私は所用のため、参加することができませんでしたので、私からのメッセージを託します。

当協会は昨年7月、駐日ブルガリア大使・ブラゴヴェスト・センドフ氏を名誉顧問に、県民有志で発足しました。ブルガリアの世界遺産についての学習、ブルガリア料理教室、バラの女王・日本語弁論大会優勝者のひろしまフラワーフェスティバル参加を含む広島への招聘ブルガリアからのJICA研修員招聘者との交流などを通して、ブルガリアまた、ブルガリア人への理解を深めていくうちに、会員はそれまで遠く感じていたブルガリアを身近に感じるようになっております。

①熱線、人間の蒸発

火の玉の温度は、中心部で100万℃をこえ、大きさは1秒後に最大直径280m爆発の中心温度は100万度を超え、爆心地周辺の地表温度は、3000~4000度に。ちなみに鉄の溶ける温度は1500度余り。爆心地周辺では、一瞬にして人間が蒸発した、といわれている。

人体が受けた影響(急性障害)



①-2熱線、高熱火災

広島市の街葉午前10時ごろから午後2~3時を頂点に、一日中すさまじい炎に包まれた。

爆心地から半径2km以内の地域は焼き尽くされ、爆風で倒れた家の下敷きになり、生きながら焼け死んだ人も多くいた。



②爆風

爆発による衝撃波は、最大風速秒速440m。爆心地から500mの場所では、1m四方に19t(自家用車約15台分)という巨大なものほとんど全ての建物が押しつぶされ、人は吹き飛ばされたり建物の下敷きになって亡くなった。

また、昨年は被爆60周年の記念すべき年で、カザンラック市からもステファン・ダミャノフ市長が広島を訪問された際に感銘を受けられ、さらに当協会役員が提案した被爆展をカザンラック市で開催することに同意を頂き、今回この被爆展が実現することになりました。一人でも多くの方に61年前のヒロシマの惨状を知っていただき、それによって核兵器の恐ろしさを理解していただくことは、世界初の被爆地である市民の切なる願いであり、責務であると感じております。それが、このような形で実現したことに対し、ダミャノフ市長に心より感謝の意を表したいと思っております。

しかし、今の世界情勢に目をやると、ヒロシマの被爆者や県民が声を大にして、核兵器の拡散に反対を唱えているにもかかわらず、状況は悪化の一途を辿っております。テロの脅威は増大し、独裁的な政府によって核兵器が使用される可能性も増してきております。

今回の被爆展がカザンラック市で今、開かれることの意義は大きいと思っております。一人でも多くのカザンラック市民が訪れてくださり、核兵器廃絶・恒久平和へのヒロシマの強い願いを共有していただけますことを心より願っております。

最後になりましたが、カザンラック市の益々の発展と、市民の皆様のご健康とご多幸を心より祈念しまして私のメッセージとさせていただきます。皆様の日々がばらの花のように益々、輝かしいものとなりますように。

平成18年(2006年)8月1日

(代読: 郁子夫人)



原爆展のオー王ニングに詰め掛けた市民やマスコミ関係者

13. ブルガリアのテレビ局の取材



ダミャノフ市長らのオープニングあいさつが終わった後、ブルガリアのテレビ局が被爆者の佐々木理事にインタビューした。

同理事は、多くの友人・知人が犠牲となり自らも苦しんだ被体験と、熱線・放射能・爆風など原爆の脅威を伝え「地球上から核兵器を廃絶し、本当の平和を築かなければいけない。そのために連帯したい」とヒロシマの心を訴えた。

14. 訪問団員らが来館者と親しく懇談

オープニング・セレモニーの後、訪問団のメンバーは原爆展の会場内で来館者と親しく懇談した。



スピーチを終わって改めて会場を見



在ブルガリア日本国大使館の横山参事官、山岸

爆風



③放射能

原爆が爆発して1分以内「初期放射線」が大量にふりそそぎ、人の体に大きな被害をもたらした。特に爆心地から1km以内で直接放射線を受けた人はほとんど亡くなった。

さらに、その後は「残留放射線」があり、直接被爆しなかった人でも、救援・救護活動や肉親などを探すために壊滅した被爆市街地に行き、放射線を浴びたために、白血病やガンなどの病気になったり、亡くなったりする人が続出した。



また、被爆当時に腹の中にいた胎児の中には「小頭症」などの被害を受け生まれた人もある。

後障害





横山参事官と香川明所長に今村協団会長と



福井大使の代理で出席した横山参事官と原爆写真展について語る今村団長。後方は副市長と語るダミャノフ市長



ケファロヴァ市文化担当と懇談する海生会長夫人



山岸書記官と



2005年8月にダミャノフ市長とともに来訪し、今回は被爆者証言で通訳をしてくれたマリアさんとゲネフ館

④、黒い雨

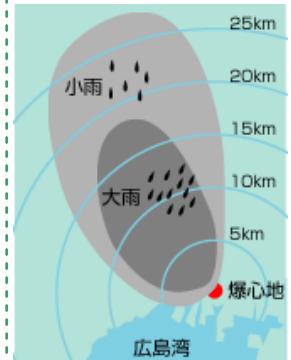
爆発後、巨大な雲が広島上空に立ち昇り、20～30分後から西向きの風によって形をくずしながら北西部に流れていった。

そして、その下の地域に「黒い雨」が降り、この雨の中には、爆発の時に巻き上げられた泥やチリ、火事のススなどのほかに放射性物質が含まれていた。

このため、爆心地から遠くはなれた地域の人

黒い雨が降った地

風が南南東から北北西に吹いたために灰じんや放射能を含んだ「黒い雨」が降った地域が爆心地から北北西の地域で降った



15. 原爆展の成功を期してカンパイ

オープニング・スピーチの後、参列者の代表者らがダミャノフ市長がネーミングしたという白ワインで原爆写真展の成功を期して乾杯した。参加者らは、白ワインをたしなみながら、しばし歓談した。



お世話になったJICA事務所の香川所長と歓談する海生会長夫人



ダミャノフ市長と佐々木理事が互いの健康を祈ってと乾杯

6. 被爆者

被爆者援護法に定める「被爆者」とは次のいずれかに該当する方で、被爆者健康手帳を所持している人をいう。

①直接被爆

原爆が炸裂した時に広島市内に居て、原爆の3大エネルギーを直接受けて被災した人。

②入市被爆

原爆が投下されてから2週間以内に、肉親・友人・知人を探すためや被爆者の救援活動活動のために爆心地から約2km以内の区域に入って、残留放射能を浴びて間接的に被爆した人。

③看護・救護被爆

被爆市街地から郊外に避難した直接被爆者を看護・救護したために、同被爆者が浴びていた放射能を間接的に浴びた人。

④体内被爆

①～③の該当者(母親)の体内にいて被爆した胎児。



来館した7年間ブルガリアに住んでいる日本人と懇談する横山参事官



市国際交流課長のバルカンスさん



16. 原爆被害の写真を真剣に見つめるオープニング参加者ら



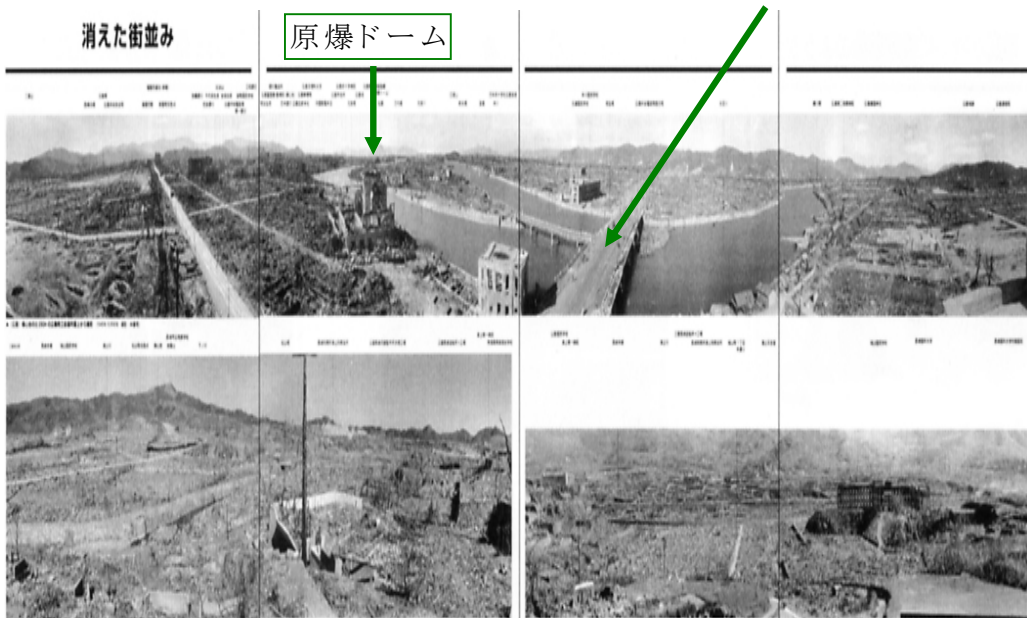
原爆展のオープニング会場には、60人余りのブルガリアと在住日本人が押し寄せて、入場開始を今かいまかと待ち望んでいた。

ダミヤノフ市長らのスピーチをはじめとするオープニングセレモニーが終わるやいなや来館者は我先にと原爆展会場内に歩みを進めた。

展示会場では、ブルガリア人同士やブルガリア人と日本人、あるいは日本人同士などの様々な素敵な人の出会いがあり、素晴らしい思い出をつくることのできた。

それは、500年間という長い間のオスマントルコの圧政から立ち上がり独立した経験や第2次世界大戦で日・独・伊+ブルガリア同盟の下で連合軍から爆撃され大きな被害を受けたブルガリア人と、世界初の原子爆弾被害を受けた日本人・広島県民が「恒久平和を強く望む心」を共通に持っているからだ、と覚えてならなかった。

1発の原子爆弾で一瞬のうちに消えた広島市街地。上段写真・中央の「T字型の相生橋」が投下目標地点



サダコと折り鶴ポスターから



1、2歳の時に被爆

1943(S18)年に生まれた佐々木禎子さんは、1945(S20)年8月6日、2歳の時に直接被爆し、逃げる時に放射能を含んだ黒い雨にも打たれた。



2、10年後、白血病に

その後、元気に暮らしていたが10年後の1955(S30)年2月に、白血病になり、医師から「長くても1年の生命でしょう」と告げられた。



原爆写真を真剣な眼差しで見る来館者。会場で放映された被爆者の証言や原爆投下後の被害を映し出すDVD映像を見つめる人の表情は、核兵器の脅威と残酷、悲惨さなどに共鳴し、徐々に曇っていた。

17. 被爆者証言の日＝8月2日(水)

被爆者証言の日、会場に行ってみるとすでに机とイスがきれいに並べてあった。前日のオープニングの時にはなかった机とイスが用意され、何時に始めてもいいように準備してあった。アートギャラリーのゲネフ館長ら職員の誠意が強く感じられた。



「被爆者の証言」会場で開始時間までに千羽鶴を折る海生会長夫人と佐々木理事ら

18. 「証言」開会前から子ども連れの家族などが足を運ぶ

被爆者・佐々木理事が語る「被爆者の証言」の本番前には子連れの若い母親や子どもたちが早くから会場に集まって来て、ブルガリア語を原語にしロシア語と英語の説明の入った展示写真を真剣に見つめていた。



来館した子どもに原爆のことを説明する通訳のシルビアさん



原爆展でカメラ撮りしてくれたマルコフ社長と通訳のシルビアさんと懇談する佐々木理事

19. 被爆者・佐々木愛子さんの証言



一発の原爆で一瞬に一つの都市が地獄と化した

— 核兵器を廃絶して平和な世界を —

被爆者

佐々木 愛子 理事

ドーバルデン(ブルガリア語、こんにちは)

私は広島に落とされた原子爆弾で被爆した一人です。当時、10歳、小学校5年生でした。広島に落とされた原爆は、わずか1kgの爆薬で、年内に14万人が志望するという大量無差別爆弾です。

この写真(壊滅した広島町の全図＝長さ約3m、幅約40cm)は原爆投下後、2か月して撮影されたものです。広島市内が広い範囲で写されていますが本当に無



3. 学校に行けなくなる

以後、広島赤十字病院での闘病生活が続き、学校にも行けなかった。



4. 千羽鶴が届く

そんな8月、名古屋の高校生たちが禎子さんらの入院患者にお見舞いの千羽鶴を送ってきた。



5. 鶴を折り続ける

「ツルを千羽折ったら願いがかなう」という言い伝えを聞いた貞子さんは、それ以来、1日でも早く元気になりたい」という願いをかけて一生懸命に鶴を折り続けた。